体育学における人間学的論議と その基礎的契機としての形而上への視野

――Spranger, E. の教育学における形而上学的論議に基づいて――

阿 部 悟 郎

〈目　次〉

1. 序　論
　1.1. 緒　言
2. 本　論
　2.1. Spranger, E. の教育学とその基底
　2.2. Spranger, E. の形而上学的探究とその方向性
　2.3. Spranger, E. の形而上的探究とその内在的・現世的形式性
　2.4. 体育学における人間学的論議とその形而上への視野
3. 結　語
4. 註および参考・引用文献

1. 序　論

1.1. 緒　言

体育学が，体育それ自体の本質や存在意義に目を向けるとき，教育という視座は不可欠なものの一つとして自覚されることであろう．そして，体育学が教育という視座から体育の本質論議を徹底していこうとすると，そこにおいて数多くの難問に不可避に突き当たってしまう．その一つが人間理解の問題，即ち，体育学は人間をどのように把握するのかといった人間学的な問題である．考えてみると，体育学にとって，そのような人間学的な問題は，永遠の課題であると言われて久しい[(1)]．ところが，それは実に難解であり，どこまでいっても依然として困難を極めそうである．そうではあっても，体育学は，それが不可避な学的課題である以上，それを無責任に放置することなく，自らの学的課題として積極的に自覚し，学的努力を積み重ねていかなくてはならない．そこで，さしあたり，体育学は多くの人間学的論議に学び，その人間学的な思考能力を耕していくことが求められよう．

さて，体育学がその人間学的な問題を立ち上げ，それに向けて他領域の人間学的論議に学ぼうとするとき，それに関わる多くの学的形式が映じてくる．確かに，人間学的な問題は，哲学領域においては西欧古代以来の伝統的な中心課題の一つであった[(2)]ことを考え併せれば，もしかしたら体育学もやはりその「不連続で不統一な，山積した資料のうちに迷い続ける[(3)]」ことになりかねない．そうであるならば，体育学は，最終的にはそれら全てを周到に学ぶとしても，差し当たっての適正な足掛かりを見出す必要がある．そこで，体育学は，そのような人間学的な問題の血統を振り返ってみなくてはならない．体育学における人間学的な問題は，体育の本質論議を教育という視座から徹底しようとするなかで不可避に立ち現れてきたものであった．それ故に，そこには，体育論議以前に，教育という視座それ自体の学的な事情が予

想されていく．試みに，教育学の一端を繙いてみれば，次のような本質的な人間学的連関に導かれていく．即ち，教育を問うことと人間を問うことは相即的であり[4]，そこには原理的な結びつきさえある[5]という．そこで，体育学は，数多くの関連領域の中から，まずは教育学における人間学的論議の諸形式に有効な資料価値を認め，そこに分け入っていく必要があろう．

ところで，体育学における人間学的論議にとって，教育学における人間学的論議が有効であるにせよ，おそらくそこにも数多くの個別理論形式が存在しているのではないだろうか．前述の如く，教育論議と人間理解が相即的であれば，なおさらその数量は膨大なものとなろう．体育学が全く徒手空拳でそこに分け入っていくならば，前述の如く，そこでも依然として「不連続で不統一な，山積した資料のうちに迷い続ける」ことになりかねない．そこで，改めてそこに人間学的論議の明確な自覚的・能動的形式を探してみるとする．これによって，そこからドイツ教育学における伝統的な陶冶論，そして精神科学的教育学，さらには1920年代以降の人間学的論議等が映じてくる．無論，それらを一連の思想的潮流として一括りする事には無理があるにせよ，その辺りを人間学的な思想動態として捉え，それらの個別形式や諸々の連関を探っていくことは有意義と思われる．そこで，本稿においてはその試みの端緒として，精神科学的教育学を代表する論者の一人として数えられる[6] Spranger, E.（1882-1963）に焦点をあてて，検討を進めていきたい．

さて，Spranger, E.は，その業績の偉大さとともに，精神科学的教育学のみならず，ドイツ教育学，ひいては現代教育学において最高位に位置づけられている[7]．そのようなSpranger, E.の生涯に亘る学究生活を一貫していたのは，人間学的な要求であったという[8]．そして，そのような人間学的な動機は，やがて必然的に教育学の問題へと帰着していくのである[9]．

ところで，Spranger, E. の教育学も，その人間学的論議も，その根本的な基盤は，その形而上学にあるという[10]．即ち，逆にみるならば，Spranger, E. の教育学は，それ自体が人間学的要求に突き動かされて構成されたものであり，そこで立ち上げられた論議の諸形式の本質は，彼を一貫する形而上学的

な思考との対応関係において，把握されなくてはならない．従って，その随所に散りばめられてある人間学的契機も，おそらくその根底に通底する形而上学的認識を踏まえることによって，より適正に把握され得るように思われる．そのようにして導かれた人間学的総体は，体育学における人間学的論議においても，有効な資料として意義深い示唆を与えてくれることであろう．

これらから，本稿においては，体育学における人間学的論議の確立と発展の為に，Spranger, E. の教育学における人間学的論議，とりわけその形而上学的論議に焦点をあて，体育学における人間学的論議に資する基礎的契機についての検討を試みていきたい．

2。本　論

2.1. Spranger, E. の教育学とその基底

Spranger, E. の略歴等については，既に別稿において辿ってある[11]．Spranger, E. は，ドイツ教育学においては，所謂，精神科学的教育学の流れにあり，ほぼその第一世代に位置付けられる[12]．とりわけ，Spranger, E. は，その精神科学的教育学の最も重要な代表者として挙げられ[13]，さらにはかの20世紀の世界が生んだ最大の思想家の一人として数えられてもいる[14]．ところが，Spranger, E. の生きたドイツの20世紀は，決して順風で安寧であったとは言えず，むしろ劇的なほどに悲運であったと言えよう．そもそも精神科学的教育学なるものは，確かにドイツ教育学において正統派として目されてきた[15]にせよ，あの国家社会主義によるヨーロッパの悲劇をまともに被らざるを得なかった，いわばそのような時代的不運に晒されてきたと言えよう．実際，Spranger, E. 自身も，当の国家社会主義の狂乱による不遇を痛いほど経験したようである[16]．そのような苦難を経ながらもSpranger, E. の教育学を一貫していた根本的信念の一つは，人間の本質についての宗教的なものを源泉とした確信であったという[17]．およそSpranger, E. の教育学は，その根本にお

いて強いキリスト教的倫理観に貫かれており，またドイツ観念論の伝統的基盤に立脚した理想主義的・個人主義的色彩が濃いとされている[18]．ここに，Spranger, E. の教育学をも，その人間学的論議をも，その根本において通底する形而上学の存在が見え隠れする．確かに，例えばあの覚醒論の鍵概念の示す処は，個人の実存に関与する超越的な形而上学の世界を形成しているとされ，そこには，所謂，宗教的色彩を否むことができない[19]．それ故に，確かに「あまりにも審美的・観想的であって実践性を欠いている[20]」，あるいは「あまりにも理想主義的・個人主義的で，現実の厳しさに縁遠い[21]」といった批判や，それ故に「一種のエレジーに終わりはしないか[22]」といった懸念も否めない．しかしながら，人間の個人としての存在の重要性を正しく思念するとき，Spranger, E. のこのような教育学は極めて有益な示唆を与えてくれるという[23]．そればかりか，寧ろそのような特性は，教育における最も究極的な要求として，肯定されなくてはならないのである[24]．従って，Spranger, E. の教育学における個人主義的な色彩，そして審美的な芳香も，それによって彼の教育学の確固たる意義の一端さえをも奪い去るものではないのである．そのうえ，Spranger, E. のそのような姿勢，即ち形而上学的な志向性については，神学科や哲学科における，所謂，宗教哲学の研究がとる立場と決して同様ではなく，この意味において，非神学的Nicht-Theologischeな立場であるという[25]．そこで，Spranger, E. の教育学における人間学的論議をより正しく把握する為の不可欠な前提の一つとして，Spranger, E. の形而上学的な論議の一端を繙いてみたい．

2.2. Spranger, E. の形而上学的探究とその方向性

さて，教育は，それを制度論の厳密な適用を逃れて言うなれば，明確な理論なしで大昔から自ずと行われてきた特有の人間活動である[26]．ところが，教育とは全く単純なものではない．それは，例えばなにがしかの知的訓練のように，できるできないといったような外的成果によって一面的に理解されるようなものではない[27]．さらには，教育は，常に文化の全体の中に存する独自

の事象であり，そこに組み込まれながら，そして多様な契機がそこでもつれ合っている為，それだけを取ってみれば教育でなかったり，あるいは単に教育に留まらない他の生の領域に関与する多くのものが，重要な教育現象に関与していることもある[28]．そして，そこにあるのは，単なる実用性・功利性と異なった，そして経済的な有用性を超えたものさえもある[29]．それ故に，そこにおいて成長し発展しゆき，絶えずその生を更新し続ける人間の存在を思念するとき，その奇蹟と神秘に敬虔な思いにさせられてしまうこともあろう[30]．そこには現世の時空を離れた形而上の次元をも予感させられる．Spranger, E. は，次のように述べる；

「原則的に，形而上のものを無視して教育学を築こうとするものは，（残念ながら結局のところ）教育の根源的な現象を見る目を全く持てないことであろう[31]．」

Spranger, E. は，教育学的思考における形而上のものへの視野を積極的に是認する．このような立場は，Spranger, E. が半世紀以上にわたる思索の末に到達した，謂わば教育学的認識の結晶とでも表現できる独特の学問的境位であるという[32]．それでは，Spranger, E. の教育学における形而上学的な視界から人間存在を眺めてみたい．

まず，Spranger, E. は，その学的営為において「人間とは，本来，何であるか」等を問う[33]．なるほど，人間は，その外的・身体的必然，即ち生存の為のさまざまな生物的法則に制約されることは否めない[34]．例えば，エネルギー摂取や代謝，体温調節等，どれをとっても，人間が生命を保つために不可欠である．そうではあっても，人間にとって大切なことは，単に生きるということではなく，よく生きるということである[35]．それ故に，人間を真に人間たらしめるものは，そのような生命的・生物的なものに留まらない，単に人間的なるもの以上のものである[36]．そこで，Spranger, E. は，人間の本質を次のように思念する；

「人間の本質は，内なる自然的拘束や，あるいは社会的拘束に尽きるものではない．寧ろ，それどころか人間の本質は，宗教的に言えば，内なる神との拘束や，哲学的に言えば，形而上的なものに根ざしている[37]．」

Spranger, E. に従えば，人間の本質は，例えば生物的な生命維持や共同体の交流等にではなく，形而上的なるものにあるという．そして，Spranger, E. は，そのような形而上的なるものを，遙かなる彼岸の彼方にではなく，人間の存在の内なる深まりに見出す[38]．人間のそのようなうちなる深まりにおいてのみ，現世を超えたもの超越的なものへ到達し得るという[39]．そこで，Spranger, E. は次のように述べる；

「（人間の）そのような内なる深まりを，内なる神に近きもの，あるいは哲学的に表現するならば，形而上なるものと呼ぶことができる[40]．」

人間は，誰しもが空間と時間に制約されているが，実に，そのような形而上的な深まりにおいて，生命的・肉体的拘束を超えて神的なるものと関わる．そのような存在の内なる深まりこそが，Spranger, E. の形而上学の注視対象である．そして，Spranger, E. は，人間の存在の内なる深まりを想いなし，次のように述べる；

「あのゲーテの言説『自らのうちにも宇宙あり』は，実に卓越した象徴を示している．人々が自らの秘やかな内界において出会うものについては，僅文に尽くしがたい．ただ，重要なことは次のことである．即ち，生成しゆくものにとって，内なるそのような深み一般に及ぶ洞察が，ようやく開かれる．いわば，時間の日常性という平面を垂直に貫く新たなる次元への到達こそが重要なのである．人々は，改めて次のことを想いなさなくてはならない．即ち，新たなる次元とは，そこにおいて価値を与えるもの全て，尺度を与えるもの全て，責務を与えるもの全ての声が聞こえてくるような，不断の自己吟味を通じて清められた内面性のみである[41]．」

Spranger, E. に従うならば，人間の存在の内なる深まりから時空間の単なる肉体的・生命的な存在と全く異なった生の次元が展かれていくという[12]．そこにおいて到達する「新たなる次元」は，「第三の次元，上への垂直の次元，別の比喩で謂うならば，深みへの次元，つまり全てを包み込む神的なものとの関係」である[13]．それ故に，そこから「生の意味やより高次な生への要求，そしてそのような高みや究極の真なる人間的な生へと到るための当為義務も展けてくる[14]」という．Spranger, E. は，人間の究極的な本質をそこにみて，次のように述べるのである；

「人間は，形而上的な深みmetaphysischen Tiefenにおいてのみ，生きられるのである[15]．」

2.3. Spranger, E. の形而上的探究とその内在的・現世的形式性

さて，Spranger, E. は，教育学における形而上学的な要求において，人間の内なる深まりをみつめ，やがてそこに神に近きものGottnaheを認める[16]．神に近きもの，即ちそれは，そこから「生の意味やより高次な生への要求，そしてそのような高みや究極の真なる人間的な生へと到るための当為義務も展けてくる」ような，そして価値を与え，尺度を与え，責務を与えるものとして，時空間の単なる肉体的—生命的な存在関係とは全く異なった別の生の次元の，つまり人間の内なる深まりに住まう超越的・絶対的な何ものかである．従って，それは内なる神とでも比喩し得るのかも知れない．それでは，Spranger, E. は，神それ自体に対しては，どのような構えをとるのであろうか．Spranger, E. は次のように述べる；

「世界の意義を創り出すもの，あるいは世界の意義を与えてくれるものとして，精神的にうみ出された，あの究極のものを，宗教的な言いかたで神と呼ぶのである[17]．」

Spranger, E. の形而上学的な論議は，純粋な思弁によって完結するものではなく，多くの形而上学的な言説は，比喩の特定形式として捉えるべきであろう．従って，あのような超越的・絶対的なものの探究は，それ自体，形而上学的あるいは宗教的と表現されるとしても，それは彼岸の彼方を想いなし，思弁的に閉じられるものではなく，それは人間の内なるものへの連続において論じられるのである[48]．それ故に，神という概念は，それは純理論的な根源を有するものでも，純構成的なものでもなく，体験された価値の内容に根ざす[49]．そうであるならば，ここで体験という概念が問題として立ち現れてくる．Spranger, E. は，次のように述べる；

「神によって与えられた感動の現世的な顕現が，『体験Erlebnis』であり，そこにおいて神的なるものが現れる．この体験の哲学は，現世的敬虔Weltfrömmigkeitの最も完全なる表現形式である．なぜならば，かのシュライエルマヘルの述べた，あの銀色の閃光の輝きのことであり，それによって人間の生の深層が開顕されるのである．ただ，それは人間に全く縁遠く，そして（些か）不気味な様相を伴うようなものではなく，寧ろ，天使の舞いをつつむ微かで絶えず鳴り渡っている（心地よい）音楽のように，そしてまもなく激しいオルガンの音のように高くそして強く鳴り響き，それからまた神の息づかいが宿るかのごとく，静寂で柔和な余韻を残すかのようである[50]．」

やはり，Spranger, E. の『体験』という概念は，独自の意味内容を指し示めしている．人間は，そのような体験によって内なる神を人格的に顕現する．この瞬間，形而上のものは形而下の独自の人格形式をとり，現世に現れ出でる．そして，それは，似非宗教の苦行等にみる破廉恥さのように人間にとって驚異なる異質さをもって迫り来るのでは全くない．それは，ある特定のドグマと全く無関係な，人間の内なる高まりをさす[51]．Spranger, E. は，次のように述べる；

「今日の人々にとっても，現世的敬虔と称されるような気持ちは，決して縁遠いも

のではない．現世における生それ自体が神聖なのであり，人々は，それが彼岸の彼方のみに限ったものではないことを知っている（はずである）．例えば，この世に新たに生を享けた乳児が眠る揺り籠の前に立つとき，人は（大いなる）敬虔さを感じる．そして，お二人の若者が互いに手をとりあい，人生の絆を結ぼうとするとき，人は人生の深い意義を感じ入る．また，嬉しきことも多少悲しきこともある多様な運命を『死の悲しき情景』にまで見とどけるとき，人は畏敬の念を抱くことであろう．

しかしながら，（そのような人間の出来事だけでなく）自然がもたらす印象についても，人々は内なる動きや感動をもって反応することであろう．例えば，深緑につつまれた山小屋が夕陽に照らされて輝くとき，あるいは春の日に，あの求め止まない心がもの想いに耽るとき，そしてニーチェの詩句『秋を想い，その悲しみに胸が張り裂けん』に追感するとき．そう，人はそればかりでなく，いとも微細で無用なるものにさえも，それが無限の関係において幾千もの細やかな糸に紡ぎ出されていることに気づくとき，それに対して（湧き起こる深い）愛を覚えるのではないだろうか？

実に，敬虔とは，人々にとっても，最も容易に出入りしやすい，このような種類（の体験）にもあるのではないだろうか？[52]」

確かに，人は予期せぬときに，予期せぬものに心奪われ，感動に包み込まれることがある．また，人は，何気ないものにさえも，愛しさを覚えたり，崇高さを感じ取ったりすることがある．なるほど荘厳な寺社仏閣に立ち入るとき，そして威厳溢れる神仏の前に立つとき，不思議な畏敬を感じ入ったりもするが，それらは非日常にある特許ではないかも知れない．従って，無限なるものとは，現世を超えた垂直方向の高きところに求められるものではなく，寧ろそれは，人々が立つ現世のあらゆる地点に可能性として存するのである[53]．実に，上を見て彼岸の彼方に住まう神々に想いを馳せたり，下を見て地上の暗く不可解な苦難に身を窶すのではなく，まずは真っ直ぐを見据え，前進していくことが必要である[54]．そのような現世におけるつとめの成果は，それ自体，恩寵と言える[55]．人間は，そのような恩寵によって神性のある部分を享けるのである[56]．そして，そのような成果が，現世的な有用性を持たない

としても，それ自体，決して無駄な徒労ではない．Spranger, E. は，次のように述べる；

「外的な成果が現れない，あるいは現れ得ないときにも，つとめを続けよう．なぜならば，いつも重要なのは，内的な勝利であり，仮に現世で実りがなくても，（そのうちにおいては）神の御前に在り続けるのだから.[57]」

実に人間の内的なるものは，現世的な有用性に一義的に縛られ得ない．そのときを真摯につとめゆくことこそ重要なのである．可視的に得るものがなくても，もしかしたらそのうちにおいて神へと到る道程にあるかも知れない．そのような恩寵こそが，内的な勝利の賜である．まさに，恩寵は，自らつとめるものにこそ降り来たり，そして自らつとめゆくもののみが神性の顕現に与り得るのである.[58]．苦しみに対しても純粋に，そして歓喜に対しても純粋につとめゆくことが重要である.[59]．これによって，個々に迫り来る運命は内的に克服され，輝かしいものとすることができる.[60]．そして，Spranger, E. は，そのような恩寵，例えば，価値付与的に輝くようなぼんやりとした高揚感や思考によって照射されて輝くような内的状態を宗教性とする.[61]．即ち，それは決して特定の教義についての信仰形式を指し示すわけではなく，人間の存在の内なる深まりに立ち起こる神秘的な動き，即ち内なる神性の顕現を意味する．そして，人間は，そのように自らの内に最高のものを見出し，そこに安らうときに，救いと幸せを感じる.[62]．そのような個人の意識が最高の価値に充たされた状態を，宗教的な言い方で，神の恩寵と呼ぶのである.[63]．Spranger, E. は，そのような価値に与り，それによって輝く内的状態にこそ人間存在の宗教性を認めるのである．Spranger, E. は，次のように述べる；

「宗教的行為の本質は，不特定の個人の体験のその生との全体価値との関係に存する．この意味において，個人の人間存在にとって全体価値をなすものは，最高価値とも呼ばれるだろう．なぜならば，人間の生全体にとって価値あるものこそが，究極的

に重要であるからである.[64]」

従って，Spranger, E. は，人間の宗教的行為の本質を，単なる無分別な偶像崇拝や徒な苦行を通じた魂の浄化への信心にではなく，ごく普通の人々のうちにある価値との関わりの在りように探る．そして，そのような価値との関わりの契機は，特異な行為においてのみあるわけでなく，また崇高な達成においてのみあるわけでなく，日常にある微細なものにさえも，生の全体的意義や全体的価値にとって重要な要素を見出すこともできる.[65]．それによって，内なる深まりが価値付与的に輝くこともあるだろう．従って，それは全く個人的で独自な体験なのである．Spranger, E. は，次のように述べる；

「宗教性などというものは，存在する全てのものの中で，最も個人的なるものであり，それはあの究極の深みにおいては，『そこには全く己のみ存する』ような，運命的な体験と同様のものであろう．だからといって，世界の意義が，それ自体，多種多様であろうと推測する必要はない．そうではなくて，人間は各自が全く独自の方法でそれを体験し，そして全く独自の形式のものを，そのうちに得るのである.[66]」

人間は，いかにあっても，やはり有限なる存在であるが故に，絶対的価値や世界意義をそのままの形式で獲得することはできない．即ち，個々の体験を通じて得た価値や意義は，極めて独自の形式でその存在に降臨したものである．すなわち，そこには個別性と独自性があり，どこまでいっても普遍性と一般性に欠けることであろう．そうではあっても，そのような個別的な体験における恩寵の降臨は，その独自性において，他の誰よりも深くその一端に与っているのである．換言するならば，人間はその内なる深まりにおいて独自で特有の神に邂逅する．そして，そのような時にこそ，人間は神的なるものを予感することができるのである.[67]．即ち，人間はそのような体験においてのみ神を識ることができる．Spranger, E. は次のように述べる；

「人間の生全体に対して価値的な力を所有するものは，それは同時に人間存在の最高の価値を明示してくれる．また，逆に考えれば，次のようにも言い得る．即ち，それが個人的なものであれ，種族的なものであれ，その体験が主体にとって『高次な瞬間』を意味するならば，そのような瞬間の内容が，残りの現存在全体を照射し，その残りの生の全体が最高の幸福に漸近すればするほど，そしてそれに貢献すればするほど，究極的な生の意味をより多く有するようになる．ただ，おそらくは，最高の生の内容が稲妻の閃光の如く瞬間的に啓かれるか，あるいは日常的な生において次第に増大してくるかによって，その生の意味の性質も相違することであろう．もちろん，人間は，その時代によって変わりゆく内容や押し寄せてくる運命において，絶えず新たな価値体験に巻き込まれてゆくが為に，おそらくは生の究極的な意義は，決して完全には達成され得ないことであろう．（例えば）通常，人々が幸せと呼ぶものは，往々にして，単なる瞬間的な感情，あるいは生の単なる一面的な満足にすぎないことが多い．しかしながら，高次で全てを包み込み，そしてたましいの永続的な救済を保証してくれる，ある（聖なる全き）幸福は，それを超えたところに存在する．そこに到ろうとする道こそが，宗教的なつとめの目的なのである[68]．」

確かに，人間に降臨する聖なる瞬間は，人間存在全体を価値付与的に照射するとしても，それによって生の究極的な意義が全うされることはない．ただ，そのような体験によって，人間はそのような聖なる瞬間に再び与ろうと，常に希い，そしてそこに到達しようと努力するようになる[69]．そこを希い，そこに到る道をつとめ進みゆくことこそ，宗教的な在り方の本質なのである．即ち，宗教とは，特別なものではなく，寧ろ人間存在の確かな一形式であり，例えばその生命的・生物的なものと次元を異にするにせよ，それによってこそ，人間は生を享けた地上世界において，世界の高次な意味へ向かって，自らを能動的に，そして受容的に高めていくことができるのである[70]．Spranger, E. は，あのフィヒテを想いながら，次のように述べる；

「あのフィヒテの謂う『宗教的なるもの』とは，神的な生の全き意味へと到る数々

の段階を通じて，そこへ到ろうと努力することである．しかし，フィヒテに従えば，このような高まりゆく全体的ドラマは，なおもただ一つのこの世界においてこそ，実現されなくてはならないのである．永遠の幸福なるものは，例えば死後の彼岸の彼方においてはじめて求められるようなものではなく，シュライエルマッヘルに従えば，現在ある生のまっただなかに，またはその近くに，既にあるのである．『単に死して埋葬されるだけでは，おそらく至福には到達し得ないことであろう．』[71]」

従って，Spranger, E. の形而上学における宗教的なるものとは，人間の価値探究的あるいは意義探究的な存在形式を明示する．そして，価値や意義は，死してそこに召されるものではなく，その世界においてつとめ，それによって求めゆくものである．ただ生命的・肉体的に生きるのではなく，よく生きようとすること，そして現世においてつとめゆくこと，このような在り方こそが，Spranger, E. の形而上学的な探究に映じた人間存在の本質なのではないだろうか．即ち，それは，そこに単なる生活や動物的な快楽よりも，より高次で広大な要求が認められることによって，生物的・自然的な人間存在と区別される[72]．このような意味において，人間存在の真なる姿は，いわゆる宗教的なる在り方，即ち価値探究的あるいは意義探究的な存在形式として映じてくる．Spranger, E. は，次のように述べる；

「真の人間存在は，最高の価値，または究極の意義の探究である．人間の生は，そのような理解のもとで，みられるべきである[73]．」

Spranger, E. の教育学における人間学的論議，とりわけその根本的な基盤としての形而上学的な論議において照射されたものは，人間存在の宗教的な存在性，即ち価値探究的あるいは意義探究的な在り方であった．それは，人間存在における個体保存あるいは生命維持といった生物的な次元を遙かに超えた，価値や意義そして意味に与る次元である．自らがつとめ，戦い抜いてきたうちなる深まりにこそ，あらゆる外的な成果を超えて輝く価値が存在

し，それは現世的な打算では割り切ることができない[74]．人間は，そのような次元において，価値や意義そして意味を体験し，自らの有限性を押し広げ，そして拡大していこうとするのである[75]．また，何よりもそのような形而上的なるものとの接触においてのみ，現世の多様な制約や圧力に害されることなく，自らの存在を正しく守ってくれる力が与えられる[76]．従って，そのような形而上学的な次元こそが，究極的には，人間を守りそして高めてくれる力をもたらしてくれる．

それ故に，Spranger, E. のこのような形而上学的論議は，その宗教的な比喩を通して，人間学的な注視対象の重要な一形式をそこに明示してくれるように思われる．人間の存在やその生には，例えば世界意義や絶対的価値，そして神といった比喩を用いずして明示し得ない領野がある．そして，人間は，明らかにそこに与り，そこにおいてこそ生を遂行している．それを宗教という名辞で括ることに些かの抵抗を感じるとしても，それを否むことによって重要なる視野の拡がりを失うことになりかねない．ここに及んでは，Spranger, E. に従い，やはり，教育学的論議，とりわけその人間学的論議も，形而上のものを無視しては，結局のところ，その本質へと到達し得ないことに想い到らされていくように思われる．

2.4. 体育学における人間学的論議とその形而上への視野

体育事象においても，人間の存在形式はやはり多様である．そこでは，専門知を有する教師の指導のもと，児童や生徒あるいは学生が多彩な身体運動を顕現する．可視的には，そこにおいて彼らは，例えば，走り，跳び，投げ，そしてボールを操作し，卓越を競ったりもする．そして，その運動刺激が適正であるならば，そのような多様な身体運動を通じて，彼らの身体機能や身体運動能力が向上していくかも知れない．そして，そのような身体機能や身体運動能力の向上は，なるほど実生活をより快適に営むうえで有益であるかも知れない．抵抗力の亢進は，対疾病能力をもたらし，呼吸循環系の向上は，有酸素的作業能力の向上をもたらしてくれることもあろう．ところ

が，そのような身体運動にみる人間的現象は，確かに些かの実用性が認められるにせよ，その本質は，むしろ，いわゆる単なる経済的有用性を超えたところにあるように思われる．そうであるならば，それはSpranger, E. に従い，生物的・社会的次元に留まらない，より高次な次元から説明され得るのではないだろうか．

例えば，体育学における人間学的論議が，Spranger, E. に従い，形而上への視野をも併せ持つとすれば，そこに映じてくるのは，やはり時空間に制約される実在的な存在形式ではなく，例えば意味や意義，そして価値と関わる形而上的な次元の生である．なるほど，人間は日常生活において生物的にそして社会的に生を営んでいながらも，その内なる深まりにおいては常に意味や意義そして価値に与りながら生きているように思われる．喜んだり悲しんだり，悩んだり，希望にふくらんだり，そのような内的な動きは，単なる生命維持や共同体の責務から生じるものでなく，意義や価値との生産的な関わりから生じてくることであろう．従って，体育事象に多様に顕現する身体運動現象も，その個々の内なる深まりにおいては，可視的には把握され難い多くの動きが生じていることであろう．例えば，ボールを追い敵陣へと進む身体運動形姿は，骨格筋と関連諸神経の有機的連動によって，そして例えばフットボールという文化形式によって説明され得るとしても，その現象をより正しく把握しようとするならば，その内なる深まりにおける生の在り方からも説明される必要があろう．体育事象における人間存在も，その本質の一端は，形而上的なるものに根ざしているとも言い得る．そして，おそらく体育事象においてもなお，人間は，生物的・社会的な次元に留まらず，形而上的な深みにおいても，生を営んでいるとも言い得よう．

そこで，体育学における人間学的論議が，人間のうちなる形而上的な深まりへ注視しようとするとき，Spranger, E. に従い，『体験』概念が，その指導標として有効となろう．即ち，それは人間の可視的・外的な行動の軌跡としてのそれではなく，存在の内なる深まりにおける価値受容的あるいは価値創造的な生を指示するように思われる．例えば，体育事象において与る意味

や意義，そして価値，あるいはそれらの特定の個別形式としての感動，歓喜，充実，至福，さらには悲しみや絶望さえも，それに相当しよう．ところが，存在の内なる深まりにおける生，それは実に個別的で独自のものである．即ち，それらは共通理解の為の便宜的な特定名辞によって表現されるとしても，その実質はその微細において異なるはずである．なるほど，人間は，その存在の内なる深まりにおいて，例えば『感動』を個別の独自の形式で体験する．従って，身体運動において生起する『感動』も，体験する主体によって，体験する対象によって，それぞれ実質が相違するはずである．それ故に，体育事象においても，人間は存在のうちなる深まりにおいて，意味や意義そして価値を独自の形式で享受し得る．これをSpranger, E. の形而上学的論議に依拠するならば，恩寵と表現し得よう．即ち，体育事象においても，人間は存在の内なる深まりにおいて，恩寵を独自の形式で得ることができる．そして，それによって人間は，体育事象においても，神性のある部分を享けることができる．

ところが，人間は，体育事象においても，やはり有限なる存在であるが故に，絶対的価値や世界意義をそのままの完全なる純粋形式で獲得することはできない．即ち，体育事象における個々の体験を通じて享けた恩寵は，極めて独自の形式でその存在に降臨したものである．ただそれが，実に個別的で独自のものであり，どこまでいっても普遍性と一般性に欠けるとしても，それはその確かなる独自性において，他の誰よりも深くその一端に与っているのである．換言するならば，体育事象においてすら，人間は，その内なる深まりにおいて独自で特有の神に邂逅し得るのである．

さて，そのような恩寵とも呼ばれ得るものは，極めて特異で稀な対象との関係においてのみ生起する特有の体験であるように思われてしまいかねない．確かに，そこにはどこか超越的な彼岸の彼方を想わせるような抹香臭さも否めない．ところが，Spranger, E. は，その可能性を日常生活の地平にすら認めていた．これに従うならば，その可能性としての契機は，現世を超えた高きところに求められるのではなく，体育事象においても，人々が存する

凡ゆる地点に可能性として潜在していることとなる．そして，人間はそこから彼岸の彼方に想いを馳せるのではなく，そこにあって真っ直ぐを見据え，つとめゆくことが求められる．そのようなつとめにこそ恩寵は降り来るという．即ち，体育事象においても，超越的な卓越や絶対的な達成を無分別に願うことよりも，自らの拠って立つ処を弁え，そこから目標を見据えながら，つとめて直進しゆくところに，恩寵は降り来るかも知れない．そのようなつとめは，すぐさま外的な成功に直結しなくとも，内なる深まりに然るべき意義をもたらしてくれることもあろう．体育事象におけるさまざまなつとめも，確かに身体運動能力の向上に資するとしても，人間の内なる深まりにおける意味や意義，そして価値の体験としてみるならば，それは極めて重要で生産的な生の瞬間として捉えることができよう．それ故に，人間は，体育事象においてもなお，あの『現世的敬虔』に開かれている．

従って，体育事象においても，そのような体験が主体にとって『高次な瞬間』を意味するならば，そのような瞬間の内容が，その存在全体を照射してくれよう．そして，それが究極的な形式に近ければ近いほど，生の全体的意義は高まることであろう．もちろん，人間は，体育事象においても，絶えず新たな価値体験に巻き込まれてゆくが為に，おそらくは生の究極的な意義は，決して完全には達成され得ないことであろう．おそらく，その究極的な形式は，それを超えたところに存在する．そして，Spranger, E. によれば，そこに到ろうとする道こそが，宗教的なつとめの目的なのであった．即ち，多くの新たな体験を通じて多くの新たな神性をその存在に享受し，それによって究極的な形式をその存在に実現しようとする，そのような前進的なつとめこそが重要となる．それは，体育事象においても，技能の習熟や達成の程度よりも，教育という視座からみるならば，そこにおいて為されるつとめとその体験によって得られる価値や意義の質こそが，重要となるように思われる．従って，人間には，生の全き意味へと到る数々の段階を通じて，そこへ到ろうと努力することが求められる．しかし，このような高まりゆく道程は，なおもこの現世においてこそ，実現されなくてはならないのである．究

極的なるものは，例えば死後の彼岸の彼方においてはじめて求められるようなものではなく，体育事象においてもなお，現在ある生のまっただなかに，またはその近くに，既にあるのである．

これらから，体育事象における人間存在を，そのような視座のものとに眺めるならば，そこにおいてつとめゆくものにこそ，究極の形式へと到る道程が段階的に開かれていくと言えよう．実に，それは人間の価値探究的あるいは意義探究的な存在形式を明示する．体育事象においても，ただ生命的・肉体的に生きるのではなく，よく生きようとすること，そしてそこにおいてつとめゆくこと，このような在り方についても，体育学における人間学的論議において，適正に敬意を払い，そこを注視しなくてはならないように思われる．

それ故に，体育学における人間学的論議は，Spranger, E. の形而上的な探究に映じた人間学的認識に従い，次のように想い到らされていく．体育事象においても，なお真の人間存在は，最高の価値，または究極の意義の探究であり，現存在は常にその道程にある暫定的な一形姿に過ぎない．このような知的形式は，体育事象における多様な人間存在とその特有の形姿を，高みへと到る道程のもとに捉えるものであり，そこには人間の生に対する絶対的な肯定と暖かい信頼が窺われる．個別の生は，常に存在形成の可能性から現象し，その可視的な存在形姿が如何にあっても，それを正しくつとめゆくならば，生の全体に対して独自の恩寵をもたらしてくれる．それ故に，体育事象における個別的な生が如何なるものであっても，それを正しくつとめゆくとすれば，やがては生の全体において肯定される．そのようなつとめこそが，最高の意義や価値を探究しゆく道程を前進的に歩みゆく，僅かなれども確かなる一歩なのである．このような知的形式は，それが人間存在の一側面を照射する比喩の一形式であるにせよ，体育学はそこに確たる知的信頼を寄せ，その人間学的論議における視座の一つとして，その有効性を認めていかなくてはならないように思われる．

3. 結　語

体育学は，学の古典的な伝統からすれば，未だ形成途上にあること疑いなく，とりわけそこにおける人間学的論議は，明確な自覚的形式をもってそれとするならば，やはり未確立な領域であることを否むことができない．しかしながら，それだけに体育学における人間学的論議の問題設定が正当で確たるものであると確信するならば，先を急ぐことなく，まずは多くの関連領域の知的成果を批判的に取り入れ，その可能性を拡げていく必要があろう．これを通じて，体育学の人間学的思考能力が耕され，より高次なものとなっていくことであろう．従って，体育学は，より多くの関連領域の人間学的論議に学び，その限界を弁えつつ，多様な人間学的論議を立ち上げていく必要があろう．これによって，特定の条件のもとでにせよ，多くの人間学的形式に体育学的有効性が認められ，ひいては体育学における人間学的問題領域の拡充に繋がっていくことであろう．あらゆる学的課題は早々にして成らない．体育学における人間学的問題領域も，徒に早成な帰結を求めるよりも，晩期に熟してようやく体を成すような，緩やかにして確かな歩みを積み重ねていくべきであろう．

さて，ここではSpranger, E. の教育学における人間学的論議，とりわけ形而上学的な論議に基づいて，体育学における人間学的論議を試みてきた．Spranger, E. の思想にも普く通底する形而上学的論議は，それ自体，極めて宗教的色彩が強く，従って，厳密で妥当な推論を試みる際には，些か情緒的に過ぎ，その適否が疑われかねない．ところが，彼の形而上学的探究の解答は神ではなく，やはり人間であった．そして，Spranger, E. に従い，神は意味や意義そして価値の比喩として人間存在に対峙し，対話し，そしてそこに誘うことを識る時，そして現世におけるつとめの人間存在への有効性を識る時，それらは一定の説得力を有する人間学的認識として眼前に立ち現れてくる．実にSpranger, E. の形而上学的論議は神学それ自体への漸近性よりも人

間学それ自体への漸近性が強いように思われる．それ故に，体育学における人間学的論議が，一定の慎重さをもって，Spranger, E. の形而上学的論議の一端を繙く時，そこから拡がりゆく知的世界は，決して来世の救済を説く如くの宗教的な戯曲ではなく，確かな意味での人間学的なストーリーの一形式として捉えられ得るように思われる．体育学はそれを適正に踏まえながら，人間学的論議を立ち上げ，そこに映じる人間存在の形式を正しく論じていかなくてはならない．ただし，それは決して絶対的で唯一無比のものではなく，体育学における人間学的論議において常に批判対象として開かれていることを失念してはならないのである．

4. 註および参考・引用文献

(1) 川村英男（1966）体育原理．体育の科学社，p. 75.

(2) 下仲邦彦（1963）哲学事典．平凡社，p. 1070.

(3) Cassirer, E.：宮城音弥訳（1982）人間―この象徴を操るもの―．岩波書店，p. 30.

(4) 森田孝（1984）人間形成の哲学．大阪書籍，p. 4.

(5) Gerner, B.（1974）Einführung in der Pädagogische Anthropologie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S. 18.

(6) Klafki,W.：今井康雄訳（1999）精神科学的教育学―成果・限界・批判的転換―，小笠原道雄（編）精神科学的教育学の研究―現代教育学への遺産―，玉川大学出版部，p. 40.

(7) 村田昇（1995）シュプランガーと現代の教育．玉川大学出版，p. 1.

(8) 村田昇（1996）パウルゼンとシュプランガー・その師弟関係．京都女子大学教育科学紀要．26：29-30.

(9) 村田昇（1991）シュプランガー・その生涯．滋賀大学教育学部紀要．41：21.

(10) 山崎英則（1992）E. シュプランガーの人間教育論．広島女子大学家政学部紀要，28：29.

(11) 拙稿（1999）体育学における人間理解の基礎的認識：その知的契機の探究―Eduard Sprangerの教育学に基づいて．体育・スポーツ哲学研究．21-2：13-14.

(12) Lassahn Rudolf：平野智美他訳（2002）ドイツ教育思想の源流．東信堂，p. 31.

(13) 小笠原道雄（1999）精神科学的教育学の研究—現代教育学への遺産—．玉川大学出版部，p. 10.
(14) 山崎英則（1995）生涯．村田昇（編）シュプランガーと現代の教育．玉川大学出版，p. 10.
(15) 小笠原道雄（1974）現代ドイツ教育学説史研究序説．福村出版，p. 15.
(16) 村田昇, op.cit., 9)，p. 35-45.
(17) 村田昇（1963）シュプランガーにおける人文主義と国民主義．滋賀大学教育学部紀要．13：104.
(18) 天野正治（1960）シュプランガーの内面的学校改革について—戦後シュプランガー教育思想の一考察—．教育哲学研究，3：62.
(19) 輪島道友（1973）シュプランガーの教育思考の方法的特質について．東京教育大学教育学研究集録，12：31.
(20) 大浦猛（1964）第二次大戦前の日本におけるディルタイ派文化教育学研究の推移—シュプランガー教育思想の研究を中心として—．教育哲学研究，10：22
(21) 安谷屋良子（1962）シュプランガーにおける教育理想と教育者の位置—戦後の作品において—．教育哲学研究，6：63.
(22) 長田新（1956）現代ドイツ教育学の課題，教育学研究，23-6：9.
(23) 安谷屋良子，op.cit., 21)，p. 64.
(24) 神蔵重紀（1966）Eduard Spranger における“Erziehung zur Menschlichkeit”について．東京学芸大学研究報告，17-8：8.
(25) 山邊光宏（1995）宗教の本質．村田昇編，シュプランガーと現代の教育，玉川大学出版，p. 136.
(26) Spranger, E.（1933）Umrisse der philosophischen pädagogik. Gesammelte Schriften Ⅱ, Quell & Meyer, S. 16.
(27) Spranger, E.（1955）Innere Schulreform. Pädagogische Perspektiven, Quell & Meyer, S. 66.
(28) Spranger, E., a,a,O., 26)，S. 18.
(29) Spranger, E.（1958）Der Geborene Erzieher, Quelle & Meyer, S. 106.
(30) Spranger, E., a,a,O., 26)，S. 32.
(31) Spranger, E.（1962）Das Gesetz der ungewollten nebenwirkungen in der Erziehung, Quell & Meyer, S. 124-125.
(32) 輪島道友，op.cit., 19)，p. 31.
(33) 村田昇, op.cit., 9)，p. 21.
(34) Spranger, E.（1954）Macht und Grenzen des Einflusses der Erziehung auf die Zukunft. Pädagogische Perspektiven, Quell & Meyer, S. 4.

(35) Spranger, E. (1937) Kulturmorphologische Betrachtungen, Die Erziehung, 12 : 492.

(36) Spranger, E. (1970) Volksmoral und Gewissen als Erziehungsmächte, Gesammelt Schriften Ⅷ, Quell & Meyer, S. 313.

(37) Spranger, E. (1933) Der Lehrer als Erzieher zur Freiheit. Gesammelte Schriften Ⅱ, Quell & Meyer, S. 332.

(38) Spranger, E. (1964) Menschenleben und Menschenheitfragen, R. Piper & Co. Verlag, S. 14.

(39) Spranger, E. (1954) Pädagogische Perspektiven, Quell & Meyer, S. 85.

(40) Spranger, E. (1963) Vom Umgang mit Menschen. Menschenleben und Menchheitsfragen, R. Piper & Co. Verlag, S. 20.

(41) Spranger, E. (1958) Der Geborene Erzieher, Quelle & Meyer, S. 63.

(42) Spranger, E. (1954) Macht und Grenzen des Einflusses der Erziehung auf die Zukunft. Pädagogische Perspektiven, Quell & Meyer, S. 12.

(43) Spranger, E. (1953) Erziehung zur Menschlichkeit. Die Deutsche Berufs - und Fachschule, 49−10 : 714.

(44) Spranger, E., a,a,O., 42), S. 12.

(45) Spranger, E. (1952) Gedanken zur Daseingestaltung, R. Piper & Co. Verlag, S.9.

(46) Spranger, E., a,a,O., 38), S. 20.

(47) Spranger, E. (1922) Lebensform, Max Niemeyer, S. 212.

(48) Spranger, E. (1949) Die Magie der Seele, J.C.B.Mohr, S. 15.

(49) Spranger, E., a,a,O., 47), S. 213.

(50) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 18.

(51) Spranger, E., ditto, S. 40.

(52) Spranger, E., ditto, S. 13−14.

(53) Spranger, E., ditto, S. 15.

(54) Spranger, E., ditto, S. 15−16.

(55) Spranger, E., ditto, S. 38.

(56) Spranger, E., ditto, S. 145.

(57) Spranger, E., a,a,O., 45), S. 46.

(58) Spranger, E., a,a,O., 47), S. 304.

(59) Spranger, E., ditto, S. 242.

(60) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 64.

(61) Spranger, E., a,a,O., 47), S. 211.

(62) Spranger, E., ditto, S. 213.

(63) Spranger, E., ditto, S. 239.
(64) Spranger, E., ditto, S. 52.
(65) Spranger, E., a,a,O., 45), S. 40.
(66) Spranger, E., a,a,O., 47), S. 242−243.
(67) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 138.
(68) Spranger, E., a,a,O., 47), S. 52−53.
(69) Spranger, E., ditto, S. 240.
(70) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 38.
(71) Spranger, E., ditto, S. 22−23.
(72) Spranger, E. a,a,O., 45), S. 30.
(73) Spranger, E., ditto, S. 44.
(74) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 28.
(75) Spranger, E., a,a,O., 45), S. 106.
(76) Spranger, E., a,a,O., 48), S. 39.